

館林キリスト教会 デボーションノート（2006年）

11月 3日 今日の通読箇所 出エジプト記17： 1～ 7

11月 4日 今日の通読箇所 出エジプト記17： 8～ 15

「レピデムの戦い」 出エジプト記17章

レピデムはすばらしい魅力的なオアシスであつたらしい。この地方の地理に明るいモーセはレピデムを目指して、疲れた人々を励ましつつ旅を続けて来たと思う。ところが、普段はこの地方の遊牧民だが場合によっては馬賊に早変わりもするアマレク人が疲労困憊した足弱連れのイスラエルを襲撃略奪しようと、先回りしてレピデムのオアシスを占領してしまつたらしい。

イスラエル人はこの様子を見て困惑し、大騒ぎとなり、またまたモーセに食って掛かる。モーセは彼らを宥め励まし、また神に祈った。この時ホレブの岩において再び奇跡が起こり、モーセの杖に打たれた岩が割れて水が流れ出し、その水を飲むことができたのであつた。翌日、イスラエル人とアマレク人との間に激しい戦闘が行われたが、ついにイスラエルの勝利に終わった。この時ヨシュアは戦闘を指揮し、モーセは山で祈っていた。モーセの祈りの手が垂れると負け戦になり、モーセの手が上がると勝利になつたというのもこの時のことだ。

11月 5日 今日の通読箇所 出エジプト記18： 1～ 12

11月 6日 今日の通読箇所 出エジプト記18： 13～ 27

「責任の分担」 出エジプト記18章

モーセはエジプトでの奉仕開始以来、その家族を妻の実家であるミデアンの祭司エテロに託してあつた。今家族と再会し、これからまた一緒の生活ができるのは大きな喜びであつたに違いない。全イスラエルといえはなかなかの大人数だから、処理事項も、起こってくる紛糾も多く、モーセはその処理、指導、場合によっては審判と、休む間もないくらい多忙で、その激務から健康を損なう心配もあつたらしい。モーセの家族を送り届けたエテロが、しばらく滞在するうちにこの様子を見て、責任と仕事の分担ひいては民族の組織化をモーセに勧めたのは良いことだつた。一人でやっていると、人間の能力にも体力にも限界がある。また、多くの人材も活かされないし育たない。この原則は、今の教

会でも同じだと思う。

11月 7日 今日の通読箇所 出エジプト記19： 1～15

11月 8日 今日の通読箇所 出エジプト記19：16～25

「エル・ラーハの野」 出エジプト記19章

彼らは出エジプト以来三ヶ月でエル・ラーハと呼ばれる谷に到着した。正面には三つのピークを持ったシナイ山がそびえ、全イスラエル人がテントを張ることのできる広い高原だった。彼らはここに約一年間滞在し、神様から「十戒」その他の律法を頂き、また神様の示しに従って「礼拝の幕屋」すなわち「移動式、テント造りの神殿」を建設することになったのである。すなわち彼らはここで、まだ国土も産業も政府もないままに、神と律法と礼拝を中心とした宗教民族、宗教国民、むしろ宗教団体として発足したのだった。人々は十分な備えをして神の臨在を待ち望み、神の祝福の約束と命令を受けた。シナイ山は全山シェキナーに覆われて鳴りとどろいた。彼らはモーセを通してまず「十戒」を頂くことになった。

11月 9日 今日の通読箇所 出エジプト記20： 1～17

11月10日 今日の通読箇所 出エジプト記20：18～26

「十戒」 出エジプト記20章

「十戒」はあらゆる民族が守るべき基本的な神の戒め、律法である。前半は「宗教戒」つまり神と人間の関係の規制。後半は「道徳戒」すなわち人間相互の関係の規制である。またこの戒めは「何々してはいけない」という否定語で成り立っている。なぜかといえば、神を離れた人間はもともと罪の中に生きているので、まずそこから正しい生活に出発しなければならないからである。また抽象的、包括的な表現でなく、具体的代表的な一つ一つの罪を挙げている。あらゆる道徳を包括すれば、勢い抽象的で分かりにくいものになる。カントは全道徳を「汝の意志の格率が普遍妥当的であるように行動せよ」と包括したが、それは一般人にはわからないのだ。包括してなくても、もし律法を靈的に守る真剣さがあれば、「殺してはいけない」とおっしゃった神様は、憎むことも、ののしることもお嫌いだらうと、自然に知ることができるはずなのだ。またこれは出発点だから、その到達するはずの完成点については、キリストの教えを待たなくてはならない。すなわち「殺してはいけない」という律法は「主は私

たちのために命を捨ててくださった。これによって愛ということを知った。私たちもまた兄弟のために命を捨てるべきである」という教えに到達しなければならないのだ。

11月11日 今日の通読箇所 出エジプト記21： 1～11

11月12日 今日の通読箇所 出エジプト記21： 12～27

11月13日 今日の通読箇所 出エジプト記21： 28～36

「愛の奴隷」 出エジプト記21章

創世記から申命記までは、モーセが著者であるから「モーセの五書」といわれるが、また「トーラー（律法）」とも呼ばれる。「これは『律法』に加えて、律法の成立の経緯、また律法の主旨の説明、及びその律法が守られた場合と守られなかった場合の判例、などを付記したもので、所詮は『律法の書』なのだ」という解釈が成り立つからだ。21章には人間関係、社会生活の律法が記してある。その最初にいわゆる「愛の奴隷」の定めが見えるのも意味が深い。解放される奴隷が、主人に対し妻子に対する愛から、自由を望まず、自発的に続いて主人の家に留まることを希望した場合の規定だ。この後彼は生涯「愛の奴隷」と呼ばれて、立場は終身奴隷でも、家族や隣人の尊敬のうちに幸福に生活することができたのだ。また社会秩序を維持するために、犯罪人を処罰する必要も生じてくる。その場合、反射的、感情的に過剰な刑罰を行うのを禁じたのが「目には目を」の原則だ。後にキリストが「許しが最も大切だ」という教えの中で、この原則が決して最高の理想ではないことを注意されたのは有名だ。

11月14日 今日の通読箇所 出エジプト記22： 1～ 8

11月15日 今日の通読箇所 出エジプト記22： 9～20

11月16日 今日の通読箇所 出エジプト記22： 21～31

「民事訴訟」 出エジプト記22章

我々が社会生活を営む間には、利害関係の衝突や誤解から、隣人との間に悶着や争いが生ずることが多い。この間の調停や裁判がいわゆる民事問題だ。この章には多くの民事問題のケースが記してある。寡婦、孤児、寄留の他国人をいじめてはいけないという規定から、誘惑されて犯された少女の権利の保護。

貧しい人に金を貸す場合に利子を取ることを禁止。生活必需品を質に取った場合に求められる配慮。などの行き届いた律法には感心する。その反面、魔法使いや偶像礼拝者に対する厳しい刑罰もまた記憶されるべきであろう。

11月17日 今日の通読箇所 出エジプト記23： 1～ 9

11月18日 今日の通読箇所 出エジプト記23： 10～ 22

11月19日 今日の通読箇所 出エジプト記23： 23～ 33

「母の乳と子やぎの肉」 出エジプト記23章

ここには続いて民事の問題と、安息日の規定、及び年間に行われるはずの三つの祭について書かれている。(その詳細はレビ記に記される)「子やぎをその母の乳で煮てはならない」という規定は昔から難解だった。ある人は「異教の中にこういう宗教儀礼があったので禁じられた」といい、ルターは「子やぎを乳離れする前に料理してはならない」という意味にとった。しかし肉食を常とする遊牧民に対して、極端な無情、酷薄な行為を禁じた律法と考えるのが自然だと思う。ちなみにユダヤ教徒は今でも、乳製品と肉料理を一緒にしない。鍋や皿やナイフの置場まで区別している。

11月20日 今日の通読箇所 出エジプト記24： 1～ 8

11月21日 今日の通読箇所 出エジプト記24： 9～ 18

「旧契約の成立」 出エジプト記24章

イスラエル人は先祖のアブラハム以来、選民として神との特別な交わりと祝福の関係を許されてきた。それがアブラハム一家の人格や功績によるものではなく(もちろん彼らは立派だったが失敗もあった)ただ神の一方的な愛と恩恵の選びによることは自明のことだった。しかし今ここで、イスラエル人の代表者は、モーセを仲介者として、改めて神と契約を立てた。彼らは何回にもわたって「私たちは主が仰せられたことをみな従順に行います」と誓約した。これに基づいて神とイスラエルの間には契約が結ばれた。これがいわゆる「旧契約」と呼ばれるもので「新約聖書」に対して「旧約聖書」の語源となり、エレミヤがエレミヤ書で、パウロがガラテヤ書やヘブル書で論じているテーマだ。ここ

で詳細の説明をすることはとてもできない。

1 1月22日 今日の通読箇所 出エジプト記25： 1～22

1 1月23日 今日の通読箇所 出エジプト記25：23～40

「幕屋建設の命令」 出エジプト記25章

この章から31章までは、モーセがシナイ山で神から受けた「幕屋」建設の命令と「幕屋」の設計である。この記事は詳細を極め、言葉、あるいは文章による設計図の趣きがある。「幕屋」は一口で言えば「テント式の礼拝施設」だ。主が「彼らにわたしのために聖所を造らせなさい。わたしが彼らのうちに住むためである」「その所でわたしはあなたに会い、わたしが命じようとするもろもろのことをあなたに語るであろう」と言われた通りだ。ただ当時イスラエル人はテント住いの旅行者だったからこれも移動式テント造りに設計され、それで「幕屋」と呼ばれたのだった。その材料や費用の拠出も、技術の提供も、労働の供与も、ただイスラエル人の奉仕のみに期待された。そして彼らはそれを立派にやり遂げたのだった。続いて幕屋内部に置かれる、言わば調度類。すなわち「契約の箱」「燭台」「パンの机」などの製作が命じてある。いづれも純金でカヴァーされなければならなかった。

1 1月24日 今日の通読箇所 出エジプト記26： 1～14

1 1月25日 今日の通読箇所 出エジプト記26：15～36

「エジプトでの学習」 出エジプト記26章

この章には骨組みとなる木材の部分。またそれにかぶせるカヴァー部分、及びカーテン類の製作が命じてある。建築の素材として、砂漠では得難い多量の木材、多量の毛皮、多量の毛織の生地。金、銀、また沢山の宝石を必要とした。いったいどうして彼らはそれを手に入れたか。第一に彼らはエジプトを出る時、まるで戦争に勝った凱旋の将兵のように、沢山の宝物を得て出発した。これは想像以上の量であったと思われるので、宝石、貴金属に不足することはなかった。同時にそれは豊富な資金となり、必要なものを周囲の民族を通して手に入れるのに役立った。金銀宝石の細工や、いろいろな織物の技術も、優秀な彼らはエジプトで十分に習得したのだ。世界最大の富強国、文明国に住んだ300年の学習経験は、今この砂漠で神のため、礼拝のために献げられたのだった。

(出エジプト記の解説文はここまでのため、残りの出エジプト記については、機会をみて各自で通読するのもよいでしょう)

11月26日 今日の通読箇所 マタイ福音書14:13~21

「パンの奇跡」

主イエス様が数千人の者を養われた記事は、福音書の中に6回記されている。これは、この出来事が当時の人々にとって、非常に強烈な印象を与える出来事であったことを教えている。パンの奇跡は、神様がかつて荒野でイスラエルの民をマナで養われたことや預言者エリシャによって大麦のパン20個と新穀一袋をもって百人の者を養い、人々がこれを食べて余したという事に類似する、驚くべき不思議な神様のわざである。そして主イエス様は私たちの魂の事だけではなく、身体のために、物質的な必要までも心に留めてくださるお方であることを知ることが出来る。だからクリスチャンは三度の食事のたびに感謝の祈りをささげるのである。パンを分け与えるほど増えていった様子は、箴言の「施し散らして、なお富を増す人がある」のみことばを思い起こさせる。

11月27日 今日の通読箇所 マタイ福音書14:22~36

「イエス様だけを見る」

イエス様はパンの奇跡を行われる前に祈り、パンの奇跡の後でも祈られた。こうしたイエス様の常に祈る姿は、今も私たちにとってお手本だ。22節に「しいて」とあるのは、イエス様がこれから起こるガリラヤ湖の嵐を予知していたようだ。弟子のペテロはイエス様が湖の上を歩いてこられたのを見て、「水の上を渡ってみもとに行かせてください」と言った。イエス様は「おいでなさい」と招かれた。イエス様だけを見ていたペテロは、水の上を歩く事が出来た。「しかし、風をみて恐ろしくなり、おぼれかけた」。イエス様はすぐにペテロを助け、「信仰の薄い者よ、なぜ疑ったのか」と諭された。一部始終を舟から見ていた弟子達は、イエス様に「ほんとうに、あなたは神の子である」と告白した。この経験は弟子達の信仰の確信になった。

11月28日 今日の通読箇所 マタイ福音書15:1~20

「形式的宗教」

イエス様は12章で、安息日に関して、パリサイ人たちときびしい論争をしている。彼らはイエス様を殺す相談さえしている(マタイ12:14)。その時以来、彼らは、イエス様を自分たちの敵として、行動を見張り、民衆から分離させ、罠に陥れようとねらっていた。当時、神様の戒めの多くは、長い年月の間に作りだされた「言伝え」によって曲解されていた。命の無い宗教は、とかく

形式的なことをやかましく言うものである。だからパリサイ人と律法学者たちは、わざわざエルサレムから出て来て、イエス様に向かい「あなたの弟子たちは……食事の時に手を洗っていません」(2 節)と非難したのである。ユダヤ教のラビの一人は「手を洗わないで食事をするのは、姦淫をするのと同じほど重い罪である」と説いていた。どんなに念入りに手を洗っても心を清められなければ何の意味もなくなってしまうのは今も同じだ。

1 1月29日 今日に通読箇所 マタイ福音書 15 : 21 ~ 28

「カナンの女の信仰」

イエス様は弟子たちを連れて、一時、ツロ、シドンの地方に行かれました。ここはフェニキヤのことで、エルサレムの北西に位置する地中海沿岸地方です。旧約聖書には、イスラエルのアハブ王妃イゼベルがシドン出身で、バアル礼拝を盛んに行い蔓延し、深刻な事態に至ったことが記されています。このような異邦の地でした。カナン人はむかしイスラエル人がエジプトを出て、約束の地にやってきたとき、そこに住んでいた人々です。彼らはまことの神様を信じる生活からは遠い異教の生活をしていました。このとき、この女の人は娘を思う一心でイエス様に助けを求めました。イエス様のうわさを聞いてこの人なりに、イエス様を信じていたのです。イエス様は彼女の信仰を試すかのように対応していらっしゃいましたが、この人の謙遜に必死に求める信仰をごらんになって、お答えくださり、「女よ、あなたの信仰は見あげたものである」とお褒めくださいました。イエス様のご愛と求める信仰の姿を教えられます。

1 1月30日 今日に通読箇所 マタイ福音書 15 : 29 ~ 39

「パンの奇跡」

イエス様はツロ、シドンから南東に向かい、ガリラヤ湖の東、デカポリスを通ってガリラヤ岸边に来られました(マルコによる福音書7章)。デカポリスは名前のとおり、10のギリシャの町々の集まりでした。イエス様によって人々の病が癒され、人々は「驚き、そしてイスラエルの神をほめたたえた。」のです。人々は三日間も家を離れて、イエス様の後を追って来ていました。イエス様は空腹の彼らを気遣って、イエス様のほうから弟子たちに食事について持ちかけておられます。弟子たちが答えて差し出された七つのパンと少しの魚を、五千人を養ったパンの奇跡の時のように、感謝の祈りをささげて分け与えてくださいました。異邦人のカナンの女の人に対しても、デカポリスの付近の異邦人に対してもイエス様は彼らの求めと、欠乏に答え、備えてくださいました。なによりもイエス様は彼らの霊的な欠乏に心を痛めておられたのではないでしょうが。